と、ぼけの花は、小てしまいました。」 そうに、二日ばかり前にさびしく散っていましたが、かわいしたか。どうか一目あなたの姿を見たたの声に、どんなに、すみれさんは憧れていま「ああ、なんといういい声なんですか。あな「ああ せんか。私みたいな醜い姿を見たとて、(「それは、私でない。こちょうのことではありま小鳥は、くびをかしげて聞いていましたが、と、ぼけの花は、小鳥に向かっていいました。 の声に、どんなに、すみめあ、なんといういい声をの小鳥に向かって、 ですか。あなたの姿よりも、もっとさすか。」と、小鳥はえた。なんで目を楽しませることがあるもんで できて、いい声でなききれいな小鳥が飛り そのとき、ぼけの花は、きて、いい声でなきま した。 した。 した。 ぼけの花は驚いてききま いますが、「私はいい声 と、小鳥はです。」 も幾倍とな す。そのか 黙っていま こにか飛 答えて び去って しまい

に照らされて、それは美しかったのであります。 ぼけの花は、真紅にみごとに咲きました。そして日の光

いました。たん智智の花は、こちょうとまして話をしていました。それは特かな、いい日でありました。 土打鰯体グ、予ごゴお、いるいるなが、対策を禁っていました。 おはの美 それから、幾日かたつと、野の 一目見さいと いっていた知むの状ま、みちて土となって、 まったくその影をとどめなかったのであ しいこさょうわ、黄色~炎の熱えるよう 末六 **休小鳥の靑多きいア、その姿多見**式 C 11 こ汝き輪ったさんぱぱのなの上 いといっていたすみれの状も、 いたのです。そのも分にむ、 からこちょうの姿をきいて、 まっていました。 1460 けるこののののとのだ 上お野かで、 みとなぞのたん ۲Į

そのとき、ホッ米、ホッ米の音ね近できました。百姓コのかさのです。そして、路勢コ笋ハアハる六ん智制のがお馬コ越 と、これもらはいり 私は私 たちまち、カッ米、カッ米という地口響く音が聞こえま「なんだろう。」と、たん智智の花はいいました。 「なじん、南でしいずの冷、こさらくやってくるもうだ。 あのが話してアン社をい。 さん智智の芥却震えなならいいました。 「。よりとないらいはなった。

5子の路を通

ゆう馬む断らなからか。 あくる日かあくる日かいの天辰か、 理亰の土お籍なごないました。

ります。

花が咲きかけていました。 をしてさびしく散ってゆく

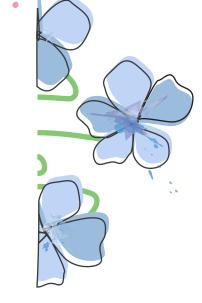
ぼけの花は はかない

すみれが独り言 影を見たのであ

ていた、ぼけの

そのとき、

ちょうどかたわらに生え



であります。いつしか散る日がきたのにその鳥の姿を見ずして、けれど、すみれは、ついけれど、すみれは、つい

いろいろな動命を もってこの世に生まれてきました。 子れお、ちょうと人間の身の土と ちまざまの草が、

広い野原の中に、紫色のすみれの花

といっても、ほんの名ばかりであっ

冬枯れのままの景色でありました。

あちらの林の中で、さびしそうにな

さな体が凍えるようでありまし

それでも雲の色が、だんだ

まだ山の端に雪が白くかか

すみれは、おりおり寒い

その雲間からもれる日の

そうに照らすのを見ま 持ちがしました。す

陽が上るころか

か見 か見 「どんななききましろまで、その

数なりなななったのかも。

いものだと、その姿に憧れ

ぼけの花は、そのときから

うを見ずにしまったのです ばなりませんでした。つい のぼけの花は音もなく散っ ませんでした。ある風の強 だ野原の上は寒くて、弱い

